

令和4年度 県立長野図書館協議会議事要録

1 日時

令和5年(2023年)3月2日(木) 午後1時30分～午後3時40分

2 場所

県立長野図書館 3階会議室

3 出席者

＜委員(五十音順)＞

渡邊匡一会長 内山由香里委員 春日由紀夫委員 田川圭子委員 田中一樹委員
西山卓郎委員(オンライン参加) 平賀研也委員 松山佳奈子委員 棟田聖子委員

＜県立長野図書館＞

森館長 関副館長兼総務企画課長 永野資料情報課長兼資料係長
北原課長補佐兼総務係長 篠田企画係長 槌賀主査 横山主任 町田主任
柳沢主任 畔上主事 金子主事 内川主事 佃主事

＜長野県教育委員会事務局 文化財・生涯学習課＞

増尾課長補佐兼総務係長 小澤主査

4 会議次第

- (1) 開 会
- (2) 館長あいさつ
- (3) 委員紹介
- (4) 会長選任
- (5) 会議事項

ア コロナ禍における運営・利用状況
イ 令和4年度主要事業について
ウ デジとしょ信州について
エ 令和5年度予算について
オ 総合計画等の策定状況、中期目標について
カ その他

- (6) 閉 会

5 会議の概要

- (1) 館長あいさつ(要旨)

本日はお忙しい中、協議会にご参加いただきまして誠にありがとうございます。

令和4年12月に委員の任期が満了になりまして、継続して関わっていただく委員の皆様に加えて、新たに2名の公募委員の方をお迎えすることになりました。後ほど自己紹介をお願いしたいと思います。

協議会の開催は、1年前の3月2日に開催しましたので、ちょうど1年ぶりということになります。

後ほど詳しくご報告いたしますが、本年度、長野県内全77市町村と県とが協働した電子書籍の貸出サービス「デジとしょ信州」が始まりました。また、3年前に始まりました「信州ナレッジスクエア」に関わる地域情報資源のポータルサイトの活用に進展がありました。

いずれもいわゆる非来館型、住民の皆様が図書館に来なくてもお使いいただけるオンラインサービスの充実ということになります。県立長野図書館では、「デジタル化された資料や情報の充実を進めておりますが、それによってリアルな図書館の機能をも充実させていく」

ということを目指して、この1年取り組んでまいりました。

県民目線でご覧いただきましたら、「ここはもっともっと頑張った方がいいよ」というところがまだまだあるかと思います。

本日は、そういったご意見も是非出していただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

(2) 会長選任

本年1月1日付けの委員改選後初めての会議のため、新たに会長を選任。委員の互選により渡邊匡一委員を会長に選任した。

(3) コロナ禍における運営・利用状況

資料1-1により関副館長兼総務企画課長より説明

資料1-2により永野資料情報課長兼資料係長より説明

(4) 令和4年度主要事業について

資料2-1により森館長より説明

資料2-2、2-3により永野資料情報課長兼資料係長、篠田企画係長、槌賀主査より説明
森館長より補足説明

(5) デジとしょ信州について

資料3-1、3-2、3-3により企画係横山主任から説明。

(6) 令和5年度予算について

資料4-1、4-2、4-3により永野資料情報課長兼資料係長から説明

(7) 総合計画等の策定状況、中期目標について

資料5により森館長から説明

(8) その他

(9) 委員との主な質疑応答

質 疑	応 答
電子図書館の利用者の年齢や利用時間帯が紙の資料の貸出がメインの図書館と違うという説明があったが、比較の数値などあればわかりやすいと思った (西山委員)	本の貸出と年代の関係性は、リアルな図書館では児童書を読む世代とシニアの世代のところでM字カーブを描くのが一般的。また、30代・40代の世代は一般書ではなくて児童書をよく借りるという統計が出ている。つまり、その年代の方は自分のための本ではなく、お子さんのための本を借りている方も多い。一方で、電子図書館では、児童書ではなく実用書とか小説を借りている。デジタルであれば、その年代の方が自分のための本を借りることができているということが、統計から読み取れる。(森館長)
学校図書館との相互貸借がR3は増加したがR4はそれ以前と同程度であったのは何か理由があるのか。(西山委員)	学校側が授業等の関係で相互貸借を多く利用したと推測はできる。(永野資料情報課長) 先生方が積極的に相互貸借の活用のため動かれたということもあるかもしれない。どうして数値がこのように動いたのかを掴むことによって、これからの事業戦略につながっていくと思うので、実績のあった学校側へ問い合わせてみたい。 (森館長) <補足> 会議後、実績のあった高校へ確認し、その結果R3の増加は、探究学習にむけてまとまった数の利用があったことがわかった。人の動きやカリキュラムの影響であったことを全委員に報告。

主要事業実施状況で成果や今後の課題等の説明があったが、その後どうなったのか、事業の狙いはどうだったのかなど、継続的に数値の指標などを示すほうが取組の意義が伝えやすいのではないかと感じた。(西山委員)	指標との関係でいえば、子供たちがたくさん登録しているところでは、学校の中で電子図書館が有効なツールとして活用されている状況が見えてきた。 非常に多く貸出されているのが高森町。学校図書館と公共図書館の連携で、学校単位でデジとしょ信州が利用されている。このような事例も参考にしながら、学校連携チームで検討していただいているところ。さまざまなアプローチを考えていきたい。(森館長)
3 階ラボの空間利用の活動の評価について、実施したことによってどのような効果や課題があったのかをどのように把握して継続しているのかという点についてはいかがか。(渡邊委員)	評価という意味では何回開催したのか、何人参加したのかといった数的な評価は必須だと思う。 人が常駐してはいないが、ものづくりに興味のあるコミュニティの方々と、職員が一緒になって、やったことは意味がある。 また、そうした取組の中から「プログラミング教室をやってみたい」という若者が出て来てくれた。まずは、回数や人数をきっちり押さえつつ、そこから活動の広がりが出てきている部分を質的に評価したいと思う。(森館長) この場所は何かやっていい場所なんだ、ここに来ると何かが動いている、何かが起きているから居心地がいいなと感じてもらうことが大切だと感じている。数を重ねて日常を作っていくことはすごく大切。指標には毎回の参加人数も必要だが、これだけ実施しているという頻度・回数も重要。(横山主任)
素晴らしい可能性を持っているデジタル化について、実際に各地域の図書館の館長がどのくらい価値を見出しているのかという部分が心配。及び腰だったり、マイナスイメージを持っていたり、自発的ではなく「県立がやるから自分たちもやる」という人もいる。 デジタル化にはこんな可能性もあるんだということを、一般の利用者にPRすることも大事だが、市町村の図書館職員に向けても、その良さを体感していただくことは重要だと感じているがいかがか。(春日委員)	図書館の受け止め方も、変わってきていると感じている。例えば、ステップアップ専門研修でデジタルアーカイブを取り上げたところ学校司書の皆さんが半分以上、公共図書館司書や、大学図書館の司書も参加してくださった。関心も大きくなり、実際に動いているものが目に見えるようになって実感がわき、自分たちの地域や学校でもやってみたいと思っていただけるようになってきたのではないか。ある学校司書の方から「そろそろデジタルを目の敵にするのをやめる時がきた」という感想も寄せられた。 読書バリアフリーに本気で取り組むということも、視覚障害をお持ちの方向けのサービスを熱心に進めておられた館が中心になって進めていただいている。これから広がっていくと期待している。(森館長)
現在の職員構成を説明してほしい。事業を進めていくにあたって、司書のキャリアパスを考えていかないと困るのではないか。現在長野県では正規司書の採用も実施されておらず、県立長野図書館においても正規司書が6名しかいない。これだけ多く	非常に重い話である。県教育委員会にもとても頑張ってもらっているが、かなり厳しい状況。ここにいる職員も含め、すべての職員が全員体制で図書館の運営に関わっている。実際のところ、定員司書枠で臨時的任用職員が増えており、

の事業を実施し全国的にも注目され、とても頑張っているが、このままでは5年後、10年後も継続していくことは厳しいのではないかと。司書は専門性だけでなくマネジメント能力のある人材育成が重要。これは、県立図書館だけの問題ではないが、必要であれば協議会としても長野県や県教育委員会へ提言すべきと思うがいかがか。 (平賀委員)	今後も司書の採用は厳しい状況で改善の見通しは立っていない。 外部から何らかの声が上がることは効果的だと思うので、ご協力いただけるのはありがたい。図書館だけの立場だと視野が狭くなってしまうので、それぞれの立場から助言いただけるとありがたい。(森館長)
資料 2-1 の主要事業計画 (1) 資料・情報のところで、資料の収集保存とあるが、ここに、「資料の創造支援」といった「県民が知る資料を創造していく」ことも伝えられたらいいのではないかと。リーディングプロジェクトから全員プロジェクトへ移行するといったような。何かのプロジェクトを1・2か所で支援しながら作っていたものを、事例として見せていくことが物事を広めていく上では有効だと感じている。(平賀委員)	主要事業計画は毎年見直している。非常に重要な観点なので、次年度の計画を立てる際に盛り込みたい。(森館長)
国立国会図書館のデジタルコモンズでは県単位の史誌や地域資料だとかを自由に検索できる。長野県史や信濃史料はどのような状況か。(渡邊委員)	国立国会図書館では大規模に電子化を進めている。長野県史、信濃史料等は、従来は国立国会図書館内のPCや公共図書館への伝送で利用できる状況だったが、コロナ禍で個人への伝送も可能になる等、状況は改善してきている。 今後は、著作権処理ができればインターネット公開という道も開ける。国立国会図書館では全文検索ができるものも増えて来た。長野県史はこれからだが、信濃史料は既に全文検索が可能。県立歴史館による「信濃史料データベース」の継続が難しくなっているため、代替手段としてエンドユーザが利用できるように、優先的に調整していきたい。(森館長)
子供の通っている小学校では週1回自主学習という宿題がある。自分の好きなことを調べてノートに書き出すという宿題で、インターネットを使って調べている。そんな時にデータベースを使ったり、電子図書館の本を見て調べたりできればいいなと思った。ただ、そのやり方を知らない。図書館でもいろんなことをしているけれども、まだまだ知られていないと感じる。電子図書館が始まった夏ごろはポスターとかあったが、今は新しく知る機会がない。何か広報はやっているのか。高森町のように、学校で教えてくれたりすれば使い道も広まると思う。(松山委員)	学校現場で使い方など教えてもらえるといいという件については、学校に対するアプローチがまだこれからという状況なので、取り組んでいきたい。広報については、確かに新聞等にとりあげてもらったりすると利用者が伸びるけれど、落ち着くと新たなユーザーの獲得にはつながっていないというのは感じている。まずは図書館職員が自信をもって使えるようにならないと利用者への呼びかけに繋がらないので、利用者支援・広報部会で図書館職員が利用者の皆さんにきちんと伝えられるよう、使い方マニュアルの整備に取り組んでいる。メディアを活用して広報することや自治体での講座活用などの実例も出てきている。図書館関係者以外の方から住民の方をフォローしながら電子図書館を活用したいというお話はすごく前向きなことと捉えている。図書館ルートは限界がある。生活に密

	着したところで話題になった時にサポートに入れるような準備を仕掛けていきたいと思っている。(森館長) 天龍村での活用事例を紹介したい。図書館関係者ではなく、役場の住民課の方から地域包括センターと連携して 65 歳以上の方にタブレットを使ってもらえるようにしたいということで、その窓口を設置するにあたって、デジとしょ信州をぜひ活用したいというお問い合わせをいただいた。(内川主事)
--	--

(6) 委員からの意見や要望

- ・ デジとしょ信州の選書にあたっては、ターゲットを考えた。生活サイクル的にリアルな図書館に行きにくい方のためのコンテンツを全体の 2 割くらい購入できればと頑張って選書したところ、リアルな図書館の開館時間外に実際利用していただいているデータが出て、こちらの意図した結果につながっているのかなという感覚がある。(棟田委員)
- ・ 昨年イベントで3階を利用させていただいた。空間利用としてとても役に立つと感じた。研修などもここでやったことが各図書館へ発展があったかどうかということも指標になってくるのではないかなと思った。(田中委員)
- ・ 20 代、30 代が図書館から離れてしまう、何とか図書館にという思いや、その世代が読みたいくても読めなかったという部分で、時間的にも空間的にも電子図書館を利用するという発想で改善していける余地があるんだということが分かった。(春日委員)
- ・ 公民館図書室は、地域のお年寄りに利用していただきたいという思いはあるが、地域の公共交通機関や皆さんの身体的な状況などでリアルに利用していただくことが難しいこともある。でも、電子図書館という形でデジタルリテラシーを向上させていくことも地域の中で取り組んでいく価値があることだと思った。(春日委員)
- ・ 区誌の作成を進めているが、先日、森館長はじめ篠田係長、槌賀さんに来ていただいて、デジタルアーカイブの作成や使い方など教えていただいた。その後、区誌のデジタル担当が実際にどんな形になるのか作ってくれたので、それを皆でスマホを出して体験してみた。実際にやってみて、QRコードの読み取りとはどういうことなのか、イメージでできるようになった。県立長野図書館が関わってくれるという認識も職員の間で広まって、とても良かったと思う。これからも自分たちで調査したものがデジタルという形で見ていただけるようになっていけば、喜びにもつながると感じた。デジタル化すべき機材を購入する費用も、地域の企業から快く寄付をしていただけることにつながった。これから、ボランティアをお願いしてデジタル化を進めていきたい。企業の方とも懇談をしたところ、昔のことを残していくこともいいが、未来に向かってこの地域でどうしていきたいのかという視点を区誌に残してほしいという意見もあった。(春日委員)
- ・ 学校現場で働いていてやっぱり図書館は人だなと思う。図書館に育ててもらったと感じている。探究県と言うなら、県や県教委は『探究県』と言うたびに司書を1人増やしてほしいと願う。学校現場では1年生タブレット全員購入が始まった。探究学習の中でタブレットを使っているが、学校IDを使って電子図書館につながれるようになれば、とてもありがたいなと感じている。(内山委員)
- ・ ナレッジスクエアとかデジタルコモンズとか自分の中で整理しないと情報が混在してしまっているけれど、学校では生徒たちが課題研究で面白いことに取り組む機会が増えてきている。今は学校の中でそれを共有したり発表したりしている機会がほとんどを占めるが、データとして登録されることで、学校の垣根を越えてほかの学校でこんな面白いことをやっている人がいるということを知ると面白いと思うし、刺激にもなる。学校

現場にいと私自身の勉強不足もあるけれども、図書館でのデジタル化の情報が入ってこないという一面もある。是非学校を巻き込んでほしい。学校でも誰でも知っているという形になればいいと思う。(内山委員)

- ・ 古い時代出版された資料のデジタル化についてよく言われることに、「間違っているものが結構あり、それをネットで公開することはよくない」ということがある。でも、研究する側からすると、それは使う側の問題。使う側がきちんとリテラシーを持って使うというのが基本だと思う。調べる材料の資料はあればあるほどいい。それをどう使うのかはその資料を出す側ではなく使う側の問題であるということ、常に使う側の立場で考えてデジタル化に対応していただきたいと思っている。(渡邊委員)
- ・ 公民館でもスマホ講座が流行っている。非常に切実なこととして、今は連絡も申請もスマホからという時代になってきている。図書館にもつながるということになれば、使ってみようかなと思う地域の方々もいると思う。(春日委員)
- ・ 実際に地元の図書館で電子図書館の登録をしようと思ったが、紙で申請して、10分ぐらいの座学でいろいろ話を伺って予約登録をしてという手続きが大変だった。図書館のホームページから入ろうと思っても、トップページに貼っていただかないと、たどりつけなかったりする。高齢の方も一度習ったけれどわからなくなって、もう面倒だからいいやということにもなってしまった。ホームページからのアクセス方法なども各図書館に指導していただいたほうがいいのではと思った。(田川委員)
- ・ 県民に寄り添う形での課題解決に動いているのかということかと思う。アクセスしやすいということが使いやすいということにつながる。(田中委員)

6 その他

- ・ 会議終了後、「信州・学び創造ラボ」で委員と職員との懇談を行った。